

同じ北海道から参加した通信隊員の戸田さん(写真左)と一緒に(昨年1月25日、第1次越冬隊の上陸点、西オングル島の三角点ポイントで)



る積み石)があります。初めてそこを訪れた時、私は道すがら振り返った時の谷間らしい地形が印象に残りました。その時に写真

やビデオを撮影したものを、後日衛星写真で撮った地形と比べてみました。すると、北東に位置する昭和基地の方角から、高速

道路を飛ばす車のような激しい流れに押され続けられ、傾斜や起伏はあるものの、自分の意志に反してケルンの方向にまっすぐに流される

の方向にまっすぐに流される気がかぬ谷間のルートがあるように思えたのでした。ちなみに、この流れの速さは秒速35メートル。時速125キロメートルもの爆速です。

福島隊員の行方不明から55年目の2015年9月21日。私は戸田さん(総務省北海道総合通信局職員)を誘い、無線機のテストと野外で行う医学研究を理由に、西オングル島の福島ケルンまで2人で歩いてみました。

第56次隊最年長の2人です。天候は悪くない日でした。それでも片道2時間くらいかかりました。越冬2回目の戸田さんは元氣なままでしたが、私は疲労困ぱい。ケルンにお参りをしたから、しばらく立ち上がれず、雪の中に座り込んでしまいました。

戸田さんとは、その後も毎月のように4回、昭和基地から西オングル島のケルンまで歩いてみました。そして福島さんの歩いた道順をほぼ推定できたのでした。昭和基地からケルンまで、やはりほぼまっすぐな道程。北東と南西をつなぐ一本道になりました。この調査結果は、仮称「戸田・及川ルート(推定福島ルート)」として改めて発表したいと思っています。

昭和基地は、実は南極大陸から数キロメートル離れているリュツォ・ホルム湾の東オングル島(面積は約3平方キロメートル)に位置しています。

オングルは、ノルウェー語で「釣り針」を意味する単語です。第1次隊の永田武隊長らの上陸地点となつたのは、隣の西オングル島でした。

沿岸部では滑降風が氷床から滑り落ちるように海に向かって吹き出しています。その結果、昭和基地にはいつもほぼ一定風向の北東の卓越風が吹き込みます。厳冬期にブリザードとなつて吹き荒れる時は、平

第56次越冬隊員は、北海道出身の三浦英樹隊長を筆頭に、観測部門を担当する10人、設営部門を担当する15人の総勢26人で構成されていました。

観測部門には、気象現象をとらえる定常観測、宙空圏、気水圏、地殻圏等の変動を観るモニタリング観測や研究観測があります。

南極は日本から約1万4千キロ離れていて、地震と無縁だと思われがちですが、2011(平成23)年3月11日の東日本大震災、2015(同27)年9月のチリ沖地震をはじめとする世界中の大きな地震波は、昭和基地の精密機器にもその姿を現しました。南極付近でも1998(同10)年3月、マグニチュード7.9の巨大地震が発生しています。

(続く)

南極に学ぶブリザードの記憶

60年間の日本の南極観測史上、観測隊員が亡くなった事故が一度だけあります。その不運な出来事は、第4次隊の大先輩、福島紳隊員のことです。

1960(同35)年10月7日から11日にかけて、昭和基地を含む一帯にはひどいブリザードが吹き荒れて

います。以前は「あすか基地」「ドームふじ基地」「みずほ基地」なども使われていましたが、それらは一部無人観測だけを継続しています。

一般には知られていませんが、1970(昭和45)年から15年間、昭和基地では観測ロケットを打ち上げていた時期があります。当時用いていた木造のRT(リーダー・テレメーター)棟は基地内に残っているのですが、「幽霊が出る」といつの間にかうわさが立って、以来普段は誰も近づかないという「開かずの間」状態になっているところがあります。

基地の高所作業車は、隊員たちが分担して定期的に

点検と整備を行います。その際、伸縮式ブーム(長く伸びる腕)をRT棟にまっすぐ向けて作業すると、なぜかいつも天候が回復し、手間のかかる作業も順調に終わることが出来たのです。これは私にとってちょっとした驚きでした。そして節分の日の恵方巻きを思い起こしました。

特定の方角を向いて、願いを思い浮かべながら長い巻きを食べると縁起が良い、とされている縁起かつぎのそれです。

「RT棟の幽霊のお力添えじゃないかなあ」。作業を手伝う私は、いつの間にか本当にそう信じるようになっていたものでした。



戸田さんと二人で福島ケルンまで徒歩移動中の私。なぜカメラを向けられたのか、この時はまったく理解できていませんでした(2015年9月21日、この日の平均気温はセ氏マイナス25.5度)

もの暴風雪が流れ込む中で、福島さんだけがそのまま行方不明になりました。

越冬隊員が総出で捜索しました。しかし一切手がかりを見つけないことは出来なかったのです。

8年が経ちました。越冬隊は何度も世代交代しました。そしてついに遺体が発見されたのです。

1968(同43)年2月、第9次隊の時でした。基地

から4キロメートル離れた西オングル島の外れ。例年でない暖冬のおかげで深い雪に隠れていた福島さんが基地を出た当時のまま仰向けに倒れた状態で見つかったのです。

この遭難のことは、新田次郎著の小説「非情のブリザード」に細かく描写されています。小説上では実際と死因は異なっていますが、彼はどんな無念の思いを抱

きながら最期を迎えたのでしょうか。

時代は移り、この事故をきっかけに、ブリザード時の行動には厳しい制限基準が設けられています。禁止令が出ると、外の作業を直ちに終え、近場の建物に避難します。その後建物間の移動もしてはなりません。

ただし停電や火災等の非常事態に備え、気象隊員からブリザード予報が出ると、早めに建物と建物の間を、目印用ロープでつなぎます。万が一、視界不良の中で移動が必要になれば、隊員たちは体に結わえた短いロープを、その建物間のロープに連結して手繰りながら移動するように決まっています。

西オングル島のケルン

西オングル島までは通常は雪上車で海水上を移動し、上陸地点も定められています。停車して10分間ほど歩くと、福島さんの見つかった場所に建てられたケルン(慰霊碑の意味を込めてい

均風速が毎秒25メートル以上に達することもあります。吹雪というより、台風で水かさが増す川の濁流のようです。シャベットの液体が吹きつけるので息も凍りつくほど。それが南極です。生半可な気持ち、中途半端な準備では向かえない場所なのです。